思ってます　三　　西をさむ

じゃんけんで負けて蛍に生まれたの　池田澄子

もし澄子さんが、じゃんけんに勝っていたならば果して何に生まれていたでしょうか。

私ならば、きっと「じゃんけんに勝って緩む緒兜虫」と雌の分捕り合戦に勝って踏ん反り返っている愚かな兜虫ぐらいしか詠めないでしょう。これじゃ地口の駄作です。何時もしかめっ面をしている人には笑えない句でしょう。でもその様な人達をも受け入れる寛容な精神を私たちは必然的に授かっているのです。これは人間として生まれてきて決して忘れてはならない事実だと思ってます。

笑顔では喧嘩は出来ません。笑顔の向こうから必ず幸せはやって来ます。「じゃんけんのあいこで飛び込む火取虫」。お！少しは私にもロマンチストの血が流れているのかもしれません。

池田澄子さんも子どもの頃は、何十回何百回と無く皆でじゃんけんをした事でしょう。でもこれは勝ち負けを競う為にしていたのでは有りませんでした。お弾きや鞠突きなど遊びの順序を決める一つの手段として行っていたのです。もし負けたとしても決して相手を恨む様な事はしません。自然と謙譲の心が育まれていったのです。多分、澄子さんの少女時代は戦中戦後の一時期であったろうと推察されます。父母や兄弟との団欒の中でのささやかな幸せは、誰とは無く笑みが零れる時だったのでしょう。悲しみや苦しみは何時の時代にも知らない内にやって来るのです。此の時の記憶が池田澄子さんを蛍にさせたのです。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

ところで、東京の豊洲だけの話だと思っていたのですが、今度は大阪は豊中市でも出て来ました。日本の二代都府県ですよ。海を埋め立てたり、池や沼を潰して有害物質を隠蔽するとは余りにも自然界に対する人間の横暴です。

海辺には時折荒波も押し寄せて来るでしょうが、太陽や月が昇ったり沈んだり、又夢を乗せた舟が行ったり来たりします。森の友達は、花や植物、そこで命を育んでいる小鳥や動物たちです。決して人間ではありません。私達は時たま森や海の慈しみを授かっていればそれで十分なのです。

権力と金力が森林を伐採して行きます。これでは益々殺伐とした世の中に成って行きそうです。俳句なんか創って居られなくなる時代がそこまで来ている様な気がします。

お金に余裕が無くとも、心には余裕を持てるじゃありませんか。俳句は競う物では有りません。ただ素直に心象を短い文章に詠い込めれば、それでいいのです。それを読んだ人が素晴らしい俳句に仕立て上げて呉れるのです。

その一つの方法として私は何の衒いもなく俳句は滑稽に帰るべきだと思ってます。

くちびるは舐めてやわらか浜昼顔　池田澄子

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。